



首都大学東京の50人

研究にロマンを求めて

～研究者から学生へのメッセージ～



首都大学東京

TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY

目次

研究テーマ

研究者

情動の発達と、人とのあいだでの調整の不全

カテゴリー：心理学

所属：都市教養学部 都市教養学科
人文・社会系 心理学・教育学コース

須田 治 教授

1

憲法裁判の研究

カテゴリー：法学

所属：都市教養学部 都市教養学科
法学系法律学コース

穴戸 常寿 助教授

2

イギリス社会史、都市史、企業者史

カテゴリー：経済学・経営学

所属：都市教養学部 都市教養学科
経営学系経営学コース

岩間 俊彦 准教授

3

微分方程式、変分問題

カテゴリー：数学

所属：都市教養学部 都市教養学科
理工学系 数理学コース

高桑 昇一郎 教授

4

高齢者・障害者の交通と道路や 移動しやすい交通環境の創出

カテゴリー：交通工学・国土計画

所属：都市環境学部 都市環境学科
建築都市コース

秋山 哲男 教授

5

スポーツ医学の画像診断

カテゴリー：健康・スポーツ科学

所属：健康福祉学部 放射線学科

新津 守 教授

6

発行にあたって

首都大学東京の多様な、そして特色のある研究を、在学生を中心に本学への入学を希望している高校生などに向けて、研究者からのメッセージとして紹介していきます。

その中で、皆様が普段講義を受けている先生方の「教育者」としての姿とは別の、ロマンを追い求めて研究に打ちこむ「研究者」としての姿をお伝えてできればと思います。

初回は本学広報委員に執筆をお願いしました。

首都大学東京 広報委員会事務局

先生方の寄稿をお待ちしておりますので、各部局の広報委員までお申し出下さい。

研究テーマ イギリス社会史、都市史、企業者史

カテゴリー：経済学・経営学

研究者名：岩間 俊彦（イワマ トシヒコ） 准教授
所 属：都市教養学部 都市教養学科 経営学系 経営学コース
担当科目：都市経済史 ・ 、西洋経済史、欧州経済史、
企業者史特論 など



研究概要

イギリス社会史、都市史、企業者史、とりわけ、18世紀から19世紀のイギリス都市における中産階級について研究しています。言い換えれば、産業革命期の都市の人びとが、いかなる営みをし、どのような社会的関係を結び、自己や他者や社会をどのように認識していたのか、ということが私の主たる関心です。

イギリスの歴史に興味を持ち始めたのは、大学に入学当初、一番勉強したかった東西世界の交流史の研究が様々な点で困難であることがわかったため、次に興味を持っていた、「民主主義の先進国である」イギリスを勉強するようになったという不純な動機によっています。多くの日本人は、イギリスに対して好意的な印象を持つことが多いのですが、私も、イギリスに対して、世界において「正義」を貫く国家というイメージを持っていました。このようなイメージは、勉強が進むにつれて大幅に相対化されましたが...

歴史研究では、新しい史料を発見し、整理し、解釈すること、史実やデータを蓄積すること、既存の歴史理解を再考すること、経済学や社会学をはじめとする既存の理論を歴史理解から再考すること、が期待されています。著名な歴史家の見解によれば、歴史家は、未来を展望しながら、過去と現在の対象を常に検討し、私たちの歴史理解を深めようとしています。私たちは、現在の状況を過去の事象から判断して、未来に何らかの展望を持つことが、日常の様々な場面で求められています。このような姿勢をより洗練化する上で、歴史研究は重要な意味を持ちます。

歴史研究は、また、データや歴史像の提示といった点でも大きな役割を果たしています。例えば、過去数十年間に進歩した人口や家族に関するヨーロッパでの研究は、過去の家族=大家族・早婚といった単純なイメージが成り立たないことを明らかにしました。市場のような制度と経済発展の関係は、過去の歴史的過程のあり方に大きく依存している、という見解も大きな支持を獲得しています。個人的な体験として、私が持っていた好意的なイギリス像は、18世において、消費税をはじめとする効率的な税金のシステムを持ち、なおかつ、強力な軍隊を用いて戦争を繰り広げていたイギリスという国家像によって、大きく変化しました。

しかし、何と云っても、歴史研究の醍醐味は、自分の収集した史料を注意深く整理・解釈し、新たな歴史像を模索することです。私自身は、産業革命期のイギリス都市で発行されていた新聞を読み込み、残存する様々な記録をコンピュータデータベース化し、当時の人びとの社会的関係や政治的、経済的活動について研究を進めてきました。その作業の過程で、私の夢に、同時代の人びとが会話をしたりする場面が、頻繁に出てきました。試行錯誤の上にとど



着いた、私の産業革命期のイギリスの都市像とは、中産階級の活躍と、彼らを中心に運営された様々な自発的結社活動の重要性です。後者は、現在、私たちがNPOとかNGOと呼ぶものの起源ともいえます。このような結社活動は、多様な価値観の共生と様々な社会的関係の醸成に大きく貢献しました。近年、コミュニティにおける人びとの共生意識や関係の構築について多くの関心が集まっていますが、このような活動は、歴史的な理解を通じて、より一層深まると言えないでしょうか。歴史研究は、その行為自体が興味深いだけでなく、現在の私たちを理解するうえでも重要な参照系となっているといえそうです。